

# 3 第3回 ESD評価委員会の記録

日時：2009年3月27日（金）午後3時～5時

場所：岩手大学第1会議室

出席者：

学外委員

- 森 三 紗（宮澤賢治学会イーハトーブセンター前副代表）  
宮 野 春 雄（盛岡地区広域行政事務組合消防長）  
内 田 尚 宏（NPO法人環境パートナーシップいわて理事）  
小山田 準（特定非営利活動法人北上川流域連携交流会事務局長）  
小 林 英 世（岩手県環境生活部環境生活企画室）  
川 上 圭 一（岩手県教育委員会）  
宮 順 子（岩手県国際交流協会）

学内委員

- 砂 山 克 彦（人文社会科学部長）  
栗 林 徹（教育学部教授）

ESD推進委員会

- 玉 真之介（副学長）

欠席者：中 澤 廣（工学部教授）、広 田 純 一（農学部教授）

## 開会

○砂山委員長 お忙しいところをありがとうございます。それでは、若干、時間が過ぎましたけれども、第3回目のESD評価委員会を開催したいと思います。

最初に、あらかじめお配りしてあった資料等に基づいて玉先生から説明をお願いしたいと思います。

○玉副学長 それでは、私から本日の評価委員会の目標といたしますか、ねらいも含めてお話しさせていただこうと思います。

## 本日の評価委員会への期待

以前にお送りしたのですが、本日の資料にあります「活動の記録」をご覧ください。この評価委員会は、平成18年度に文部科学省の現代的教育ニーズ取り組み支援プログラムというものに採択された後に、そのプログラムの一つとして設置したものです。この支援プログラムは平成18年の10月からスタートしまして、2年半の計画でこの3月に終了になります。プロジェクト自体が終了するわけではありませんけれども、文部科学省からの補助、支援はこの3月までということになっております。そのことから、本日はこれまでの活動全般につきまして、私のほうで概略をご報告させていただいて、それに対する各委員のお立場からのご助言をいただきたいということです。

本来は、評価をしていただく場合、自己点検評価をまとめた上で、それに対する評価をお願いするところですが、事業を実施するのだけでもう手いっぱいでありまして、また大学もちょうど法人の第1期が終了しかけ、そして第2期の準備をするという非常に業務が立て込んだ時期でもありまして、何とか補助事業を活動として終了させることに専念せざ

る得なくなりました。その結果、本日はこの活動の記録に対してご自由にご助言をいただいて、今後のプロジェクトの継続、定着、発展に向け、ぜひ活発なご意見をいただければありがたいと思っている次第です。

それでは、これを一頁めくっていただきますとプロジェクトの目的と取り組みとなっております。これは3年前に文部科学省に申請した計画案でありまして、それをそのまま載せております。この3年間は基本的にこの計画に基づいて、この計画を実施するということに力を注いでまいりました。ただ、何とかいいましても計画ですので、予定どおりにいかないこともありまして、多々苦勞することが多かったわけです。この段階で活動を振り返るに当たって、3年前はどういう計画でいたかということを確認していただく意図で、ここに改めて目標と取り組みということで再掲させていただいております。

## 取組の概要

取り組みの概要としては、ESDという国連で採択された世界的な取組を積極的に受けとめて、特に本学の教養教育に一つの方向性、すなわち「旗印」として掲げ、「21世紀型市民」と言われるような大学に求められている課題に応えることが柱になっております。それをどうやってやるかは、①教養教育にESDの価値観を中心に置くことです。教養教育は非常に多様であるがゆえにバラバラであるという評価を受けやすいのですけれども、そこに「尊重の価値観」といった心棒を与え、柱にするということです。

それから、②「4つの領域」と「4つのタイプ」で授業科目を分類し、つながりが見え易いようにすること、③それから学外の団体と積極的な協力による高年次学生向けの授業科目を開講したい。それから、④4番目には



ESD副専攻を企画したいという構想で取り組んできました。

結論から申しますと、1から3までにつきましては一定の成果を得て具体的に実施しております。ただ、最後の副専攻制度については、まだ学内で合意が得られず、引き続き検討中で、まだ実施には至っておりません。

取組が養成しようとする人材像としましては、「環境問題を初めとする複合的な人類的な諸課題を生涯にわたって課題として意識して、身の回りで具体的な問題に取り組む」、そういう知識を行動に移せるような人材を養成する人材像として掲げました。

プログラムの成果と効果という点では、文章としては書いておりませんが、「目標の共有化」という点があります。教養教育は、多くの先生方に担当していただくわけですが、目標が共有されることで意識が次第に取れんしていくといますか、方向性をもってまとまりが生まれるところで教育改革につながることを期待しています。

次の3ページ、4ページ目は実施体制等ですが、教育課程と教育方法という点については、先ほど申しましたように、教養教育に心棒をつくらうということで尊重の価値観というものを中心に置くわけですが、これには、宮沢賢治という本学の卒業生を重ね合わせて大学のシンボルとして意識していくことを目指しています。

それから、先ほど言った領域分けとタイプ分け行い、また、学外の行政、NPOとの連携を強めていこう。あるいは小、中、高との連携もしようというのが取組の3となっています。

実施体制としましては、ESD推進委員会を設置して進めたいということです。

それから、4ページの(4)評価体制をご覧いただきますと、一番下のパラグラフに、

県の総合防災室とか教育委員会、それから環境ネットワークいわて、それからイーハトーブセンターに委員をお願いして評価委員会を設置して継続的な情報提供、定例の委員会による取組を評価していただく計画になっています。

5ページに図がついておりますので、こういった形で実施と評価ということで取り組むという計画をしたということで計画がスタートしております。

### 平成18年度の実績

6ページからは取組実績ということで、平成18年度分、19年度分につきましては、2回までの評価委員会でご報告しておりますけれども、ざっと振り返っておきたいと思います。まず、ESD推進委員会を平成18年度10月に設置いたしました。そして、ESD自体が言葉としましても、内容としても学内に浸透しておりませんでしたので、セミナーを継続的に開催していく取組をはじめました。委員会で検討しながらセミナーを開催していったわけです。7ページに18年度10月以降のセミナー5回分が出されております。これを見ていただきますと、5番のところに2007年3月6日には漫画家のますむらひろしさんから、「宮沢賢治が見た風景－不思議な停車場－」という講演をいただいておりますが、本日の資料の中にその記録が冊子となっております。

それから、教養教育の「旗印」ということで全学共通教育の理念と目標のところに「ESDというものを共通に意識することに努めています」という内容を大学教育総合センターで確認して進めております。また、領域とタイプ分けという分類を開始し、ESDの授業科目を公募して支援するというのを始めております。高年次課題科目という新しいジャンルもはじめました。これは、3年生、

4年生は専門教育中心になりますが、もう一度、学部を越えて集まって現実の具体的な課題を取り組むというもので、平成19年度から「男女共同参画の実践を学ぶ」という科目の開講をしております。

ESD自体は世界的な取組ですので、積極的に国外の、海外の高等教育におけるESDの取組を視察、調査しました。これが7番目の海外視察調査です。ESD自体は非常に幅広いものですから、初等、中等教育、この分野でも世界の動きがたくさんあるのですけれども、本学の場合には高等教育、特に大学レベルの取組を意識的に追求して調査しております。この年はフランス、韓国、タイ、イギリスと、これらはいずれも翌年に国際シンポジウムを開くことを念頭に、シンポジウムへの参加依頼も含めてこの調査に行っております。

それから、小中高大の連携を当初から計画をしております、上田地区の小学校、中学校、それから2つの高校と大学で防災などをテーマとした校長、学長によるサミットを開催しております。

9ページ目にはフォーラムの開催です。この文部科学省のGPは必ず成果を広く一般に公表していくことを求められていますから、こういったフォーラムで活動を発信したわけです。ホームページの開設、データベースの構築、パンフレット、資料の作成等、ESDの普及啓発に力を入れて学内合意の下地をつくることに力を入れました。成果としては、ESDという科目分類ですとか、高年次課題科目などもつくることができました。海外視察にも積極的に取り組みました。以上が平成18年度は半年間の取り組みでした。

### 平成19年度の取組実績

平成19年度は、1年間ということで4月からESD推進委員会、先ほどのメンバーでは

ほぼ毎月1回ずつこの委員会を開催して、さまざまな取り組みを行ってまいりました。セミナーにつきましては、ほぼ月1回のペースで実施しております。月1回までいきませんね、2カ月に1回くらいのペースで実施しております。

この年は、ESDを織り込んだ授業を開講する方に対して、資料収集や教材等の経費支援を行いました。19年度のメインイベントといえますと8月30日から9月3日まで岩手県立大学と共催で行いました国際シンポジウムです。「持続可能な未来のための教育」をテーマにメトロポリタンニューウイングとアイーナを会場に2日間のシンポジウムを開催いたしました。

前年度の国際調査等を踏まえて、韓国、中国、そしてタイ、カンボジアから講師を招待してシンポジウムを開催しました。基調講演には県立大学の谷口誠学長にお願いしたりしております。シンポジウムでは、本学の平山学長も加わっております。新聞でもかなり大きく報道されまして、県内にESDをある程度知っていただく機会になったのではないかなと思っております。

このときの成果としては、やはりアジア規模でESDの連携ができたことで、ここに参加いただいたタイのサイアム大学の学長さんからは2年後にタイで似たような会を開きましょう、というお話をいただきましたが、まだ具体化していません。

それから、今年2月に本学でヤングリーダーズセミナーという取組がなされましたが、これには中国、タイ、韓国の大学から学生に来てもらって、そして岩手大学及び葛巻町等をフィールドにしてセミナーを行いました。その際にテーマを「食と持続可能な社会」としてESDの中身で国際交流のプログラムも実施されました。国際交流センターが中心



になって実施したのですけれども、今後、国際交流を行っていく際に、ESDがテーマの1つになっていく方向が見えてまいりました。

13ページには、(5)番として、「HESDフォーラム2007in盛岡」があります。計画の段階でESDは世界的な取組ですから、①世界との連携、それから②幼稚園から大学までの連携、そして③国内の大学との連携という3つのウイングを広げたいと考えていました。この国内の大学とのESD交流として、この年の12月に「HESDフォーラムin盛岡」を開催いたしました。このフォーラムには16大学が代表者を送ってくれて、各大学でのESDとか環境教育の取組を紹介し、交流しました。このときに緩やかなネットワーク組織として、今後HESDフォーラムを続けていくことが了解されまして、翌年の2008年12月には立教大学で第2回が開かれておりますし、ことしは10月に岡山大学で第3回目が開かれることになっています。本学の呼びかけがきっかけとなって、ESDの大学間のネットワークが今後継続的に発展していくのであれば、うれしいと思っております。

19年度の国際会議への参加と海外視察は、タイとドイツへ行って取組の発表や調査を行っています。そして、評価委員会を開催させていただき、パンフレット、資料等をつくっております。

19年度は、教養教育にESDを織り込んでいくことと、国際シンポジウム、それから国内の大学間ネットワーク、これが成果であろうと思います。

### 平成20年度の取組実績

続きまして、平成20年度も引き続きESD推進委員会を開催しながらさまざまなプロジェクトに取り組んでまいりました。本年度の特徴は、セミナーが非常に頻繁に開かれたとい

うことです。これは、推進委員会のメンバーがさまざまな形で自分の専門分野から持続可能な社会づくりにつながる講演会をどんどん企画していただいた結果です。ただ、今はいろんなセミナーが目白押し状態で、なかなか人に集まってもらうことが難しく、少人数の場合もありました。このうち幾つかは授業科目と組み合わせて、授業科目のところに講師に来ていただいて、それを公開して他の方にも参加していただく開催の仕方をして、学生にも積極的に参加してもらうよう心がけたのは今年度の特徴です。その都度簡単なアンケートを書いてもらっていますので、本当であれば学生がどのように刺激を受け、あるいは意識を変えていったのか分析して、それを評価の対象にするべきところなのですが、ちょっとそこまで手が回っておりません。

前年度から支援した授業科目として、新たな科目が新設されております。この16ページの下にありますように一定の経費の補助を行ったことで、学外の産学官と連携した授業科目ができております。

17ページの一番上にあります「北上川流域学実習」は、本日ご参加いただいております小山田さん、内田さんにも全面的にコミットしていただいて実施された科目です。これまでにない体験的な教養教育科目で、北上川をゴムボートで実際に下ると、あるいは北上川の子どもの川遊びを学生がサポートするとか、体験的な学習となっています。

今年度、大きなイベントとして取り組みましたのは7月5日の幼小中高大専ESDサミットです。約1年間準備をしまして、小学校長会とか中学校長会、ここにあります共催団体に名を連ねています団体との連携で7月5日に開催いたしました。記念講演として「レイチェル・カーソンと宮沢賢治」という新しい視点からの宮沢賢治論ですとか、非常に関

心の高いフィンランドの教育についての紹介も行いまして、そしてパネルディスカッション等で県内あるいは気仙沼等の取組などと交流しています。

このサミットは、きょうの資料の中に「ESDサミットの記録」がありますので、後で見ただけであればと思います。最後のところにESD円卓会議という「サミット宣言」と、ESD円卓会議の要項も載っております。この円卓会議は、幼稚園から大学までの校種、公私立を越えた連携を1回限りのイベントで終わらせないで、継続的な協議、連携の場としていくことを趣旨として設置することがこのサミットの場で確認されました。その後幹事会をつくって準備いたしましたし、ことしの1月9日に第1回のESD円卓会議を開催しております。緑色のチラシが入っているかと思えますけれども、「一緒にやろうよ、できること!」、「テレビ・ゲーム・パソコンを消して読書する共同行動」を呼びかけています。とにかく、小さな行動でも全部集まれば大きな形の成果を導き出せることを確認できるように、CO<sub>2</sub>削減量を総計したいと考えています。また、裏面にありますように推薦図書にも取り組もうとしております。

5番目は海外視察です。今年には北欧に関心を持ちまして、北東北の弘前大学、秋田大学、岩手大学の北東北3大学の連携の枠組みで、先進的なESDの取り組みを行っているスウェーデン、フィンランドを訪問しました。

ICTを活用しまして、非常に充実したテキストをつくって地域の課題をテーマとする教育プログラムである北欧のバルチック・ユニバーシティ・プログラム (BUP) について視察調査いたしました。200以上の大学が連携してつくっておりますプログラムの中心がスウェーデンのストックホルム近郊にありますウプサラ大学になっておりまして、非常

にたくさんの大学の連携の中で学生も受講しているということを聞いてきました。

フィンランドでも同じようにトゥルクという都市にオーボアカデミー大学がBUPのセンターで、そこでも話を伺ってきています。この取組を参考にして、今後、北東北3大学の連携を進めたいと思っております。調査報告は、パンフレット等をまとめています。

20年度のまとめとしては、全学共通教育にESDを明確にした授業科目が生まれてきたこと、全学共通教育、専門教育でそれぞれ領域とタイプをマークした授業が行われてきたこと、それからセミナーが頻繁に開催されたこと、さらに、幼小中高大専の連携がサミットとなり、円卓会議となったこと。それから、北東北3大学でもESDの連携の種を播くことができたことではないかと思っております。

関連して、実は岩手県内の5大学学長会議という連携がありまして、昨年11月から「いわて高等教育コンソーシアム」となっています。昨年は、富士大学が中心になって開かれた学長シンポジウムでも、「持続可能な地域づくり」というテーマで実施されております。そういった連携のテーマ設定のところに「持続可能な社会づくり」が少しずつ浸透してきているのかなと思っております。

以上、2年半の活動を報告させていただきました。ご質問いただいたり、ご意見いただいたりしたいと思います。

○砂山委員長 どうもありがとうございました。まず、随分いろいろと取り組んできたという率直な感想を受けたのですが、評価委員会の仕事は評価のまとめをすると当初予想されておりました、実はきょうも評価の案なりが出されて、これにどう思うかということが一番理想的にはあるのだらうと思っております。そこまでは届かなかったということなのです。



で、お手元の「活動の記録」と今の報告に対してご意見を出していただこうと思います。今後のことについては改めて、時間をとることとして。

### 「経済危機」「学力向上」とESD

○砂山委員長 私の感想としては、今非常に経済的な混乱、大きな壁にぶち当たっていると思います。これは大学にとっても学生の就職もですね、社会自体が大きな問題にぶち当たっていると、こういう状況だろうと思っております。これがESDの活動とどういう関係になるのか、そこら辺の理解が必要だろうと思うわけです。

一方では、「ESDサミットの記録」を開いてみると、参加者が別の方向を向いているのではないかなと印象を受けたのです。例えばレイチェル・カーソンの遠山さんの話と、来賓あいさつで「学力の向上は絶対必要である」と述べられている方もいますし、学力の向上とESDとがどういう関係かも問題点を感じた次第です。

皆さん、どうぞ自由に、時間もありませんので。

○玉副学長 今の砂山先生の出された2つの点ですね、経済的な破綻と今私たちが取り組んでいるESDとの関連、それから学力の向上とESDの関連、この2点について、私の考えをごく簡単にご紹介します。本当は非常に深いテーマですので、そんなに簡単に言えないのですけれども、やっぱりこの経済危機をもたらした一つにこれまでの新自由主義的と言われるような市場競争を最優先して、結果は自己責任とするものの考え方ですね。これはアメリカのブッシュ政権等で非常にはっきりしていましたし、日本でも小泉内閣あたりで非常に明確に打ち出されてきた。そういう動きの極限に今回の経済破綻が起きたと考えら

れます。それに対し、人と人が豊かな人間関係をつくっていくという価値観を持った取組として発展してきたものの中にESDもあると思うのです。したがって、むしろ今回の経済危機によって世界全体の価値観が問い直されて、その価値観の見直しの中で、改めてESDが評価されてくるのではないかと思います。非常に表面的な言い方なのですが、そのように思っています。

それから、学力の問題もある意味、競争重視の教育論の中で競争させれば学力が上がるという議論がある一方で、学力の中身を問う議論も生じています。つまり、従来のように身につけている知識の量ではなくて、変化の激しい世の中でみずから情報を集めて問題に対する的確な解答をつくっていけるような問題解決型の学力が問われています。OECDがやっているPISAのテストもそういうことを重視した学力、新しい学力観と思います。

フィンランドが非常に高く評価されていて、教育の方法が競争というよりは、むしろ助け合って、教え合うような、そういう自発的学びを推奨する動きと、ESDが目指しています全体をトータルにとらえ、体験や参加型を重視する動きはつながっているような気がしておりまして、新しく求められている学力にESDはつながっていくのではないかなと考えています。

### 北上川流域学実習に関わって

○小山田委員 北上川流域連携交流会の小山田です。この活動の記録を拝見させていただいて、さまざまな具体的なことをやってこられたのだなと実感いたしました。

私は外部からかかわってきた立場ですが、岩手大学が地域に開かれてきているという印象をすごく持っております。私も当初、ESD銀河セミナーの一参加者でしたが、

平成20年度に実施しました北上川流域学実習では、先生方と一緒に企画や実践に関わらせていただきました。

私が北上川流域学実習で興味深かったのは、学生の反応です。4学部のうち参加者は工学部と人文社会科学部の学生でしたが、彼らの学部間の交流にも意義があるでしょうし、それぞれの専門分野の視点で、実際に川を下ってみる体験活動や地域活動をやっている人たちの話を聞くということが非常に刺激になったと思います。

例えば、河川工学を専攻している学生がゴムボートで川を下ってみて生き物をつかまえてみる体験や、あるいは、教育学部の学生が小中学校での総合的学習を想定して子供たちがフィールドワークを実践する際のサポート体制の組み方を考える機会としても、北上川流域学実習は有意義であったと思います。

北上川は岩手のシンボルであると思います。岩手大学での4年間の学生生活の中で、「地域の視点」を培ってもらいたいです。地域の自然環境や歴史文化を大学のカリキュラムに積極的に加えていただけると非常にありがたいなと思っております。

### 幼稚園から大学までの連携

○砂山委員長 実際、尊重の価値観とか、思いやりの心といった場合、自分を見つめる目が学生の中で深まってきているのかなと考えてしまうことがあります。それは何も大学入ってからではなくて小中高から自分を見つめる教育がされていく必要があると私は感じています。そうした分野は素人なのですが、自分が将来どういう仕事につくかについて、ヨーロッパを訪問した高校生が驚くのは、みんなそれぞれ自分はこういう仕事、こういう技術を身につけたいと話すのに対して、日本の訪問した学生はだれ一人としてそういうこ

とは考えていない。大学に入る受験勉強をすればいいのだという形ですと日本は来ているのかもしれませんが、仕事の選択という点でヨーロッパ、日本はシステムとして違うなという感じを受けるのです。

○玉副学長 キャリア教育を小学校から強化していこうという大きな流れがありますけれども、川上さんどうですか、県教委としても取り組まれている課題かと思うのですけれども。

○川上委員 そうですね、まさしくキャリア教育はそうなのですけれども、連携の話で、数年前までは小中高連携がかなり大きく言われている中で、最近の小中高大、専まで入っていました。とはいいいながら、では具体的に何をどう連携するのか意外にまだ見えてない。恐らく今までも必要な部分について必要に応じて連携という形でやってきたのだろうとは思いますが、例えば先ほど学力の話もありました。非常に深いという話があって、全くそのとおりだと思いますが、岩手大学では真の学力、要するに先ほどの体験型の学習を含めた生きる力、問題解決型の真の学力を目指すのだと思うのですが、一方では問題解決をするために前提となる基礎学力はどうか。そういった面で岩手大学もそうだと思うのですけれども、学校自体の守備範囲が広がっていて、家庭教育まで学校が抱えなければならない。報告書には倫理観の育成ということもありますが、社会の価値観が少しずつ変容してくる中で学校に求められているものも違ってきている。その中で、幼から大までつなげるというのは、人を育てるという意味ではそのとおりなのですが、具体的に何をどうつなげていくか。キャリア教育もそうですし、学力もそうですし。あるいは環境を中心にした取り組みについても、今までは一つの分野だけやっていたらよかったものが文化的



な背景、例えば極端な例では、日本では鯨とか、鯨文化は世界では否定される。さまざまな政治的な背景、文化的な背景、いろいろなものがかかわってきている中で、考え方、価値観も変わってきています。そういう中で、実際に幼から大までどうやって何を連携していくのか、これから詰めていかななくてはいけないのかなと思います。そういう意味では円卓会議というものが開始され、日常的に情報交換をできる場が設定されたことは非常に素晴らしいことと思っていますし、私もこの委員になって改めて教えていただいた次第なのです。先ほどの、北上川流域学実習についても、将来先生になる学生には、ぜひ必要な部分もありますし、そういった面で連携の分野があるのかと思ったりもしました。ちょっと評価にもならないような感想的なものなのですけれども。

○砂山委員長 どの面からでも。

○森委員 県の童話作家、詩人として宮沢賢治がこの高等農林で学んだとき、全国1番目に設立された高等農林として、農民救済、冷害とか日照りで困っている農民救済のためにそしてそれを解決するためにどうしたらいいか校長さんから、教授から、すべての人が一生懸命にそのために教育に向かっていったということがあります。

現在の環境問題では、皆さんご存じのとおりツバルとか、バングラディッシュでは氷が解けていったら大変なことになる。ネパールの問題もあります。宮沢賢治の精神にのっかって環境問題に取り組んでいっちゃうのは非常にいいですし、レイチェル・カーソンの講演などもあって幅広く解決に向かっていいなと私自身は思っています。

特に宮沢賢治は200年に1人の素晴らしい童話作家であり、詩人であるということが今非常に言われているわけで、人々の幸せとい

うこと、「銀河鉄道の夜」なんかにも出てきますが、本当の幸せとは何なのかということ考えた学習を進めていくとすればどんな小さい子供でもそれは学び得ることだと思います。

やはり円卓会議という小中高大の連携は、非常に良い企画だったのではないかなと非常に私は感心しています。

### 大学教育の課題とESD

○小林委員 私は、もともとは県の環境の部署にいて、重委員から委員を引き継いだのですが、今回、報告書を見て初めて知ったのですけれども、大変に幅広く活動をされていて、非常にご苦労されているというふうに感じております。

目的のところにも書かれています、問題意識をしっかりと持った多様な価値観を持った人材を育成することは、岩手県が進めております自ら考え、行動する人材の育成というような方向性はまさに重なっており、ありがたいと感じておりますし、岩手県のほうでも一緒に進めてまいりたいと感じたところです。

ここからは話が違うのですけれども、いろんなところを視察して歩かれたということで、高等教育としてのESDがまだまだ未発達だというようなことが報告書の中にあっただように見ていたのですが、先ほど教育委員会さんもおっしゃっていたように幼から大までつなげる、そういう場を設置されたのは非常に大きな成果だと私も思うのです。今は幼児期からの環境教育が大事だと言われているので、大学の時点でESDに関しての教育をしていく意味や成果について、今の時点でまとめますとどうなるかちょっとお聞きしたいと思います。

○玉副学長 ESD自体はユネスコが今中心になって進めておりまして、そして国でも省

庁連絡会議で国内実施計画ができています。その計画書の中には、幼稚園から大学まであらゆる学校教育機関、そしてさらには生涯学習のテーマとして今後持続可能な社会づくりに向けて行動できる人材を育成していく取り組みを積極的にやっていくことになっているのです。

それで、大学について言いますと、日本の教育全体にも言えるのかもしれませんが、比較的専門が分化しているわけです。中学校教育などの問題点として指摘されているのも教科単位の教育で、教科の中ではすごく一生懸命研究がやられているのだけれども、教科を越えると余り連絡がないと言われていました。大学はその極みみたいなところがありまして、どんどん専門が細分化していく。大学の中に多様な専門があるのは良いことですが、その専門同士のつながりが十分でないのがやっぱり現状の問題として考えなければならぬ点だろうと思います。

そういう中で、世界、特にイギリスも調査にも行きましたし、それからホームページなど見てみますと、今、リテラシーという言葉で、社会人として最低これだけは誰でも身に付ける必要がある言い方がされ、イギリスの場合にはサステナビリティというリテラシーをすべての大学生に付与すべきであることが国家戦略として示されています。

また、大学はこの間どちらかというと個性化、専門分化して来たのですけれども、ここへ来て最低の標準性が必要ではないかとも言われています。「学士力」という言葉も登場しました。認証評価を7年に一度必ず受ける必要もあります。そうした標準性や学士力として、環境の知識やコミュニケーション能力、倫理観とか、それから市民としての責任なども言われるようになってきています。

ですので、きっとこれからの高等教育では

各学部がそれぞれの専門性を追求するのとあわせて、大学全体として学部を越えてどういう標準性を学生に身に付けさせるのか問われてくる中で、環境に対するリテラシーとか、持続可能な社会についての認識が間違いなく課題となってくると考えております。ちょっと答えになるかどうかわかりませんが、

○内田委員 非常に多彩なプログラムが行われているとつくづく見ていました。できるだけ参加してきていましたし、私も幾つか企画等で参加させていただいたものがありますが、大学でこれだけ多種多様な取組を行うのは、何か新しい動きだなと感じております。

というのは、やはり先ほどから出ていますように専門性の追求をしてきていたが、その専門性に他との交流が余りないわけですね。みんなそれぞれがいいと思うことをして何かバラバラな社会がつくられてきている中で、やはり持続可能な社会をつかっていくには助け合うとか、共存であるとか、そういった他を理解する力が必要になってくると思うのです。そういう意味では、こういった専門分野の最たる大学で幅広い分野のセミナーをしていくということはこれからも続けてほしいなと思うところでした。特に私がかかったのは、水辺の環境に関わる授業もやっぱり人の生き方、人間が何を幸せと感じるか、豊かを感じるかみたいな精神論という変ですけども、そういったことも踏まえていろんな分野がつながっていく、そういうものを目指していったら素晴らしいと思います。あと今まで危険と思われるようなところに出向いて実際に活動していくという冒険的なところもあるのですが、私も一緒にいかかったりして、大学生や子供たちの反応を見ていると非常に生き生きとした人間関係がそこでつくられているなど感じましたので、まさしくそういったものが教育の場に人間能力



といいますか、コミュニケーション能力が育っていく場づくりをより広めていくことはいいなと見ていてそう思いました。

### ■ 教育の評価は学生の成長

○川上委員 世界、国内、地域、すべてを巻き込んだ取り組みなのですけども、基本的には大学の取り組みだろうと思うのです。そうしますと、従来こういうことをやってこなかった時代の学生と比べてこのESDを取り入れたことによって、まだ結果は出てないのだと思うのですが、4年間学ぶことによって、学生たちがどういうふうに変容していったか。教育ですので、1年後、2年後にすぐ結果が出るのではなくて、長いスパンで考えなければならない面もあるのだろうと思うのですが、それがどういう形で将来還元されるのかとか、それがやっぱり一番大きなテーマだろうと思うのです。ですから、今までだって一般教養としての時代もあったのでしょうか、それを専門的なことにつなげて解決するような人材を育ててきたと思いますが、今まさしく求められている人材がそういう時代に入ってきていますので、学生がどう変容して、なおかつその学生たちが将来社会人になったときにどういうアプローチをしてくれるかが本当に教育の評価なのかなと私は思っています。

○玉副学長 全くその通りでして、先ほどの説明の中でも学生たちからとっているアンケート等を分析したり、それぞれの授業科目でもレポート等を書いてもらっていますので、その内容が時代をどうとらえているのか、また自分の生き方とか将来像とつなげているのかを分析してみなければならないのですが、事業の実施に精いっぱい、そこまで到達できなかったのが大きな反省点です。

ですので、この4月以降は主にこれまで

やってきたことを少し定量的、定性的に、特に学生にとってどうだったのかという視点からはなるのですけれども、分析してみる必要があると考えています。やっぱり一番そこが大事な視点ですので。ただ、ESDについてどう評価するかというなかなか評価手法も難しいのですよね、だから評価手法を開発していくことも並行しながら進めていく課題と考えています。

### ■ 持続可能性という判断基準

○砂山委員長 確かに持続可能というのも難しいなと思った例があるのです。派遣切りとか、私の専門なのですが、派遣切りとかが問題になっている中で、企業は今までもうけていたではないかと、利益上げていた、それを使ったらいいではないかという議論があるのです。しかし、それに対しては使用者側では、それは現金ではないのだとか、いろいろ設備投資とか、新しい研究とか、新しい分野の開発とか、そういうところに使っている、ですので、今までもうけてきたやつを使えというのは持続可能性のない議論だという。えっ、こんなところで持続可能性という言葉が出てくるのかと思ったくらいです。だから、何をもって持続可能性なのか、成果があったかというふうなのは非常に難しいと思うのですけれども。

○玉副学長 それぞれが都合よく自分たちの議論を持続可能性に引っ張っていくのだと思うのですが、そういう争点の判断基準が「持続可能かどうか」になってきたあたりが少し時代の変化かなと思うのです。かなり重要な判断基準が持続可能かどうかというところに来ているのかなという気がします。

○小林委員 環境というと、どちらかという自然環境のイメージが強いのですけれど

も、もちろん自然環境もかなり入っているのですが、20年度のこの事業を見る限りはもっと広い意味での環境というふうにとらえたのですけれども、そんな解釈でよろしいのでしょうか。

○玉副学長 そうですね。ESD は出発点としては環境教育からスタートしたのですが、開発という問題と両立するのか、しないのかという議論の中で、やっぱり両立する道を目指すべきなのだという方向の中で、サステナブル・デベロップメントという概念も出てきました。世界的に確認されたのは、1992年のリオ地球サミットですが、そこで社会、経済、環境を別々にではなく一緒に考えていく必要があるとなったのです。これをトリプル・ボトムラインといいます。

### ■ 防災の課題と教育

○砂山委員長 今後の方向性というようなところも踏まえて、具体的な意見を出していただければと思います。

○玉副学長 そうですね、国際交流という点で宮さんにもぜひご発言いただいて、防災というのもこのESDの重要なテーマですので、宮野委員にもぜひお願いできればと、学内の立場から栗林先生にもですね。

○宮野委員 今いろんな話を聞いていて全くそのとおりだと私は思います。いまは余りにも防災の担当する者が少な過ぎる。ですから、学校の先生が防災に回るとか、暫定的と言えば大変失礼な話なのですが、そういう体制は結論から言うと失敗ばかりしているわけなのです。日本列島は地震の巣ですので、今言った総合的な勉強と環境についてもいろいろ学ぶことが防災に必ず良い結果となって帰ってくるわけです。

私も、齋藤徳美先生ではないですけども、必ず現場を見るようにしています。阪神・淡

路、普賢岳、有珠山、中越地震も見てまいりましたけれども、私も含めて防災担当の人たちは素人ですね、簡単に言えば。ですから、自衛隊が対応するのが一番いいという結論になるのですが、そうではなく防災についての教育をもっと広げていかなければならないと思います。岩手山が動き始めたときには、我々も、盛岡市も無知だったわけです。突然、言われても対応しきれない。ですから、どうすべきかといえば日頃からの対応ですね。例えば、耐震化について、全然学校がなっていない。今は金がないというが、経済効果を上げるのであれば箱物を建てるのではなく耐震化をやればもっと経済効果が出るのです。ですから、文科省も22年までに耐震化をやると言っていますが、経済的措置はしないというのですから、教育委員会さんも大変だとは思っています。

これまでも、実際にぶつかった課題に対して、岩大の先生方と連携してやってきたのですが、防災はどうしても忘れてしまったり、後回しにされてしまったり、するのです。要するに、防災の一番の問題は、災害がない時にどうするか、ということなのです。

でするので、教育の中に取り入れて、普段から様々な取組を体験を含めてやっていけば役に立つのかなというふうに拝見して感じました。

### ■ ファシリテーター、コーディネーターの育成

○宮委員 ふだん聞くお話ではないので、じっくり聞かせていただいたのですが、私も今年1年間できるだけセミナーには出させていただいているいろいろ勉強させていただいた。この1年で学校の先生方からESDという言葉がよく出てくるようになったと思いました。セミナーも新聞にかなり取り上げられて



いらっしゃいましたので、言葉そのものが大分認知されてきたのかなというふうに思います。

特に2ページのところで取り組みが養成しようとする人材像というところでファシリテーター、コーディネーターという言葉が出てきていますが、これはキャリア教育にもつながるとも大切なことなのではないかなと感じています。職場で大切なことの一つにコミュニケーションとか、あとバランス感覚があると思うのですが、ぜひ今からの若い学生の方々にはそういった意味で職場でも地域でもこういうファシリテートやコーディネートができるような人材育成をESDの中で取り組んでいただきたいなというふうに感じます。

非常に知識とか能力の専門性の高い方々がたくさんいても、実際に人と何かをやる時にはその知識がうまく生かされないことがあり、どんなに知識を持っていても社会人としてそれを活用することはなかなか難しいという感じがします。先ほど自分を見つめるというお話がありましたけれども、そういうものを幼少期から、多分昔はそういうのが自然にあったと思うのですが、そういうことが必要なかなというふうに思いました。

岩手も外国の、今は派遣切りでブラジルの方々の問題が一関では出てきているのですが、外国の方々と接触をしないで生活できるような状況ではもうなくなってきていると思います。そういう意味でも外国の方とうまくやっていけるコーディネーターとかファシリテーター能力を持った人材をぜひESDの中に取り込んでいただきたいなというふうに思います。

## 学内における現状

○砂山委員長 栗林委員からも意見をいただ

ければと。

○栗林委員 砂山委員長の他は私しか学内委員が出てないので、外部評価ではなくて内部評価として。

まず、共通教育からスタートしたことについて、私も教育学部の保健体育ですので、共通教育をやっているのですが、共通教育でなぜ体育をやるかと考えたときに、ESDの一つの柱に健康の促進があり、切り口としてESDが必要かなと思いました。今お話しがありましたコミュニケーション能力についても、もし授業中一人ぼっちでいる学生をどうするかという話がよく出るようになりました。ESDという考え方が共通教育で大きな柱になったことは高く評価できると思います。

もう一点申し上げますと、プログラムへの取り組みについてですが、ESD副専攻がまだちょっと実現していない。これは、例えば教育学部で考えればプログラムをいっぱい出せるのではないと言われてそうですが、教育学部でのESDの推進を考えたとき、今まで教育学部がやってきた教育と、これからESDを掲げる教育では、どこが違うのかという点で、内部の者としてまだ整理がついていないのが現状かなと思います。そういう点で、まだ専門教育との結びつきについては、内部の私どもももっと勉強しなくてはいけないと思っております。

ちょっと言いわけになりますが、北上川流域学実習に教育学部の学生が参加していない、とんでもないことで帰って説教をしたいと思うのですが、教育学部の学生、実は夏休みが結構忙しくて、高学年になると教員採用、教育実習などがあって、なかなか集中講義に参加できなかったのかもしれませんが、ご理解いただきたいと思います。私どもはESDとは直接関係ないかもしれませんが、教員養成の観点から社会とのつながりを非常に重視

しています。来年度のカリキュラムからは、できるだけ火曜日の午後には授業を組まないで、学生ができるだけ地域に出るように考えています。私どもも地域とのつながりを大事にしていますので、今後ともアドバイス、ご協力いただければと思いますので、よろしくをお願いします。

### ■ 今後の進め方について

○玉副学長 それでは、今後の取り組みについてちょっとご紹介した上で、もしそれについてもご意見あればということで、実はこのGPと文部科学省のこの取り組みと並行して知的財産教育というプログラムも本学は財政的な支援を受けて、こちらのほうは3年半なのですけれども、取り組んでまいりました。これも3月に終了します。

それから、それとは別にこの間、岩手県立大学、あるいは県などと協力してキャリア教育として、地元の企業に学生が出向いていって大学生が地元就職を高めるにはどうしたらいいか研究し、発表する「地場産業・企業論」という授業科目も開始しています。それから、先ほどちょっとご紹介しましたけれども、国際交流センターがアジアの日本語を学んでいる学生に来てもらってセミナーを開催しており、そのときのテーマとして持続可能な社会づくりを掲げています。

それから、岩手の5大学の中でも、先ほどちょっとご紹介しましたが、コンソーシアムを通じて単位互換とか、岩手学とか、連携を強めていこうとしています。北東北3大学でも、北東北3県の地域経済、社会、それから自治体などをテーマとした新しい授業科目を立ち上げています。

そのように、実はキャリア教育にしても、知財教育にしても、いかに持続可能な社会をつくっていくかというコンセプトにまとめら

れるというような気がしますし、キャリア教育についても自分自身の充実した人生ということと同時に、いかに地域とか社会に自分が貢献していくかというのがやはりキャリア教育の中で重要な柱になっていくと考えています。要するに、あらゆる教育や連携については、ESDを大きな傘にして、その中にさまざまな取り組みや連携を今後とも引き続きやっていきたいなと思っております。

従来このESD推進委員会という委員会を中心に取組を行ってきましたが、委員の方もやはり事業の実施でちょっと疲れがみでして、再編が必要かとおもいます。岩手大学では今大学教育総合センターという学内の教育を中心にやっているところと、国際交流センターという留学生や海外との連携をやっているセンター、それから地域連携推進センターという大学と地域との連携をしているセンター、こういうようなセンターの横の連携をもっと強くしていく必要があります。その観点でこの推進委員会という組織を教育推進本部の下に位置づけてセンターを統合するような委員会に改編すれば今後のプロジェクトの定着、継続に有効ではないかと考えています。ただし、やはり中心は教育の分野ですので、もう少し検討してみたいと思います。

先ほど言いましたように新年度に入りましたら、もう少し3年間でどんな成果があったのかの検証をやる必要があると思います。特に学生に出ているようなこと、なかなか難しいのですけれども、調べるのは、意識的に取り組んでみたいと思っております。それが2点目です。

それから、3点目はESDの良さは幅広く、いろんなものをつないでいく点ですが、余りにも広過ぎて焦点がわからないという問題もあります。実は新年度から本学はISO14001の認証取得を目指して環境マネジメントシス



テムを確立するという取り組みを開始します。それについては、学生が構成員の最大勢力ですので、学生自身がそれを自覚的に行動してもらい必要がありますし、学生自身に内部の監査委員になってもらう取組を行う計画です。ですので、ESDのいろんな分野の中でも環境を、ESDのコアとして当面力を入れてみたいと思っております。そうしますと、学生も知識を行動へという時に、なるべくエレベーターを使わないとか、比較的わかりやすい具体的な行動につなげられるのではないかと考えております。

この3年間のことを通じてできましたネットワークについても、国際的なアジアの大学とのネットワーク、それから大学間でのネットワーク、そして県内の幼小中高大のネットワーク、こういったものを何とか大事にして継続していくのも課題です。評価委員のみなさまが所属しておられる団体や組織とも、今後ともご理解とご支援いただきたいと思っておりますし、また辛口でいろいろとご注文というか、もっとこういうことをすべきではないかというご提言もいただければありがたいと思っております。そういう観点からご意見いただければと思います。

### ボランティア活動の推進

○内田委員 災害のことで思い出したところがあって、非常に重要なテーマでして、ある大学では河川の災害ボランティアを組織しているところがあるみたいですね、九州大学なんかはそうです。災害のとき、今ボランティア意識が高い学生たちが一気に押し寄せてコントロールがないまま動いて、むしろ迷惑をかけたりしているのですが、事前にどういったボランティアをすべきかを指導しておけば、混乱にもなりにくいわけです。

ちょっと宣伝にもなるのですけれども、私

はダム自然塾というのを国交省の主催なのですが、その企画等々を指導しています。それに北上川流域学実習に参加した岩手大学の学生さん2名が参加してくれたのです。夏休みに4泊5日のハードなスケジュールなので参加者がいないのですが、やっぱり北上川流域学実習で実際に川なんかに興味を持ってきて参加してくれた方もいるのです。そういった地域でいろいろ企画している取組にも積極的に参加するような意識づくりもESDとして取り組んでいただければ、今後も岩手大学から学生が参加してくれるといいなと思いません。

学生さんには、4泊5日はきついのですよ。それが条件なので、時期が夏休みですしね、アルバイトがあったり、なかなか参加者が集まりません。ただ、参加費はただですし、食事全部出ますし、名前がダム自然塾だからダムの勉強もできます。内容は、水循環と暮らしとかまさしく持続可能な社会づくりに必要なことなのでぜひ、ちょっと宣伝ですが、協力していただければと。

○玉副学長 それに2人参加してくれたというのはありがたいですね。

### 学外との連携

○砂山委員長 ESDというのはかなり範囲が広いので、少し手を広げ過ぎというか、もう少し焦点を絞ってというのが、まとめみたいな感じですかね。

○玉副学長 そうですね、まずは少し検証してみまして、当面はISO14001というあたりを少し前面に出していこうかと。

○砂山委員長 それは、今出されたような地域におけるESDの活動に大学もかかわっていくというか、そういう面もありますね。

○玉副学長 そうですね、ネットワークだと思えるのです。私もこれをやるようになってい

ろんなメールのメーリングリストに加わるようになって、いろんなところから毎日情報メールが来て、そういう中からやはり意外な発見とか、おもしろいつながりが出てきています。

**○砂山委員長** 確かに対応するほうは大変だという気もするのですが、せっかくこういう芽が出て、大学教育も開かれたイメージができてきたので、あまり焦点を絞ると、学外との連携が弱くなってきてしまうかなという心配がありますね。

**○玉副学長** いろんな点で持続可能な社会をキャッチフレーズとしてつながっていけば、これまで切れていたものもつながっていくし、それが求心力にもなっていくのではないかと考えております。

ただ、外からは比較的よい評価を受けるのですが、学内の先生方にはいろんな考え方の方がいらっちゃって、まだ先生方がみんなESDを理解し、積極的に推進するという実態にはないのです。それは時間がかかると思いますし、外との連携が広まっていくことで、また学内の先生方にもいろんな刺激があるのかなと考えておりました。

実はことし11月になるとと思いますが、盛岡市がESDフォーラム in 盛岡という東北地区のイベントを開催する予定です。谷藤市長が斉藤環境大臣に会ったときに、それを提案されたそうで、やはりさっきありましたけれども、「ESD」という言葉が時々新聞に出るようになって、少しずつですが、浸透しているように感じています。

その辺、ちょっと委員として砂山先生何かあれば。

**○砂山委員長** 実は、宮城の地域づくりのネットワークにたまたま参加して、そこにメールアドレスを書いたら、催しの案内を送ってくるのです。そこにもESDの取組が

あって、そこまでは手を広げられないとは思いますが、地域との連携はこれからもぜひそれもやっていただきたいなと思います。

**○玉副学長** そうですね、宮城教育大学ともユネスコスクールを推進する取組で連携することになっています。日本のユネスコ国内委員会が中心になっているのですが、宮城県が全国の中心になっています。県内にも少しずつまた話が進んでいくのではないかなと思いますので、宮城県との連携も進むかと思っております。

**○砂山委員長** 何か今後の方針についてございませんか。

それでは、評価をするというところまで行き着かないで終わってしまいますが、どうも皆さん忙しい中、時間を割いていただきましてありがとうございます。

**○玉副学長** 本当に貴重な意見をいただきましたので、今後活かしたいと思います。これからもいろいろな機会に情報を提供したり、またご意見いただいたりしたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。



# 現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP) 実施状況報告書

大学等名	岩手大学
テーマ名	テーマ4：持続可能な社会につながる環境教育の推進
取組名称	持続可能な社会づくりのための教養教育の再構築 －「学びの銀河」プロジェクト－
取組学部等	全学
取組担当者	理事・副学長 玉 真之介
Web サイト	<a href="http://esd.iwate-u.ac.jp/">http://esd.iwate-u.ac.jp/</a>

## 1. 取組の経緯・背景

いま大学は、専門性のみならず、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を持って社会を改善していく人材（＝「21世紀型市民」）の養成が求められている。そのためには、教養教育を従来型の縦割りの学問分野による知識伝達型教育ではなく、専門分野の枠を越えて、人間としてのあり方や生き方、現実社会とのつながりを正しく理解する力を涵養するものに再構築していかなければならない。

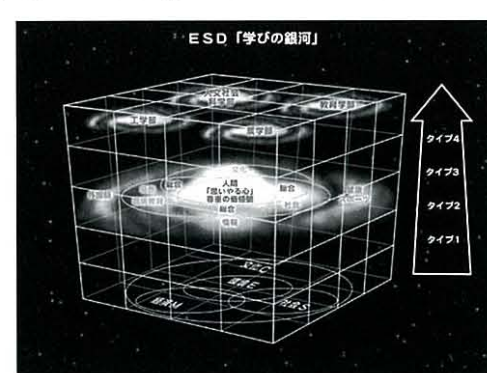
また、国連「持続可能な開発のための教育の10年（ESDの10年）」で提起されているように、持続可能な社会づくりのためには、環境のみならず、社会、経済、文化などをはじめとする幅広い分野を包含する総合性と、価値観や倫理性を地域課題の体験などを通じて涵養する実践性の両方を兼ね備えた教育プログラムが必要となる。

岩手大学は、教養教育に環境教育科目を設定し、コアカリキュラムとして一部学科を除き全学必修としてきたが、上記のような新たな課題に応えるために、教養科目のすべてにESD（「持続可能な開発のための教育」）の考え方を織り込む「学びの銀河」プロジェクトに取り組む。それにより、教養科目相互のつながりや現実社会とのつながりを理解できるように努め、教養教育全体を持続可能な社

会づくりの行動につながる「21世紀型市民」育成のための教育プログラムとして再構築することを目標としている。

## 2. 取組の内容

本取組は、5つから構成される。取組1は、すべての教養教育にESDを織り込むために、まずESDの「尊重の価値観」を教養教育のコアとして位置付け、本学の卒業生の宮沢賢治の思想を重ね合わせて、それを「思いやる心」と表現し、各教育科目が本学の教育目標にある「高い倫理性」を教員・学生が共に意識するように努めることである。



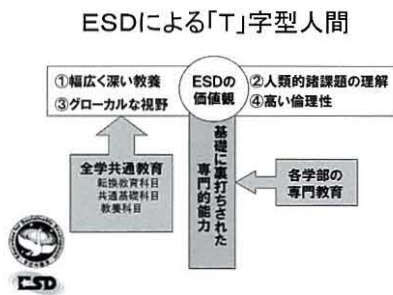
取組2は、ESDの総合性を環境（E：environment）、社会（S：society）、経済（M：market economy）、文化（C：culture）の領域で示し、実践的性格を「関心の喚起」（タイプ1）、「理解の広がり」と深化」（タイプ2）、

「学生参加型」(タイプ3)、「問題解決の体験」(タイプ4)という新しい指標で示して、履修する学生が専門分野の枠を越えて科目相互のつながりや現実とのつながりを理解できるように、下の図のようにカリキュラムの構造化と可視化を図ることである。

取組3は、学外の行政、NPO、さらに小中高校と協働して、環境問題をはじめとする地域の具体的な問題について、フィールドワークを含むタイプ3、4の教養科目、さらに3年次、4年次向けの高年次教養科目を新設することである。

取組4は、学部の専門科目についても領域とタイプを認定し、教養教育と専門教育を横断してESD科目を一定単位以上履修した学生に履修証明を与える全学的なESD副専攻を検討することである。

取組5は、ESDを通して世界の大学との連携、国内の大学との連携、そして地域の幼稚園から高校までの教育機関との連携を図ることである。



これらの取組は、学長が先頭に立つと共に、その推進は理事・副学長・学部長を構成員とする教育推進本部の下にESD推進委員会を置き、この推進委員と教育・学生担当理事・副学長がセンター長を務める大学教育総合センターが連携して企画に取り組んだ。

取組1については、本学の人材養成像を右の図のように「T」字型人間と表し、横軸の教養教育と縦軸の専門教育を「ESDの価値

観」で結び合わせる可視化を行った。また、宮沢賢治の「世界ぜんたいが幸福とならないうちは個人の幸福はありえない」「正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである」(「農民芸術概論綱要」)を引用して、「学びの銀河」プロジェクトと宮沢賢治との関連付けを意識化することとした。

取組2については、本学の全学統一Webシラバスに、「ESD関係」の欄を作り、そこに各教員が記号を用いて、4つの領域と4つのタイプのどれに授業科目が該当するかを示すようにした。また、ESDの理解を教職員・学生に普及するために、ESD銀河セミナーを開催し、2年半に30回継続した。

取組3については、全学共通教育に新しい授業区分として「高年次課題科目」を設け、外部の行政やNPO、企業、他大学と連携したESD科目として「男女共同参画の実践を学ぶ」、「都市の自然再生プランニング」、「北上川流域学実習」、「津波の実際から防災を考える」、「環境都市盛岡づくりプロジェクト」、「社会のなかの法律問題を考える」などの新規科目を開設した。また、1、2年次向けの教養科目にも、「持続可能なコミュニティづくり実践学」、「現代社会をみる視角」、「健康のセルフコントロールと社会参加」、「岩手大学の環境マネジメント」、「地元企業に学ぶESD」等の新規科目が開設された。さらに、コアカリキュラムの環境教育科目も、4種類から11種類へと充実を図った。

取組4については、副専攻制度研究会を立ち上げ、研究会において5大学への調査を含む検討の下に副専攻制度に関する答申がなされ、今後、具体化へ向けて検討していくこととなった。

取組5については、平成19年度に韓国・中国・カンボジア・タイから大学関係者を招待





して、国際シンポジウム「持続可能な未来のための教育－アジアにおける大学の役割と連携－」(8/30-9/3)を開催した。同じく平成19年度に、本学を会場に「HESD フォーラム 2007in 盛岡」(12/20)を開催し、ESDに取り組む国内の16大学による取組の報告と交流を行った。このフォーラムは、翌年に立教大学、平成21年度は岡山大学で継続的に開催されている。平成20年度に洞爺湖G8サミットに合わせて、岩手県内の幼稚園から大学、専門学校までの園長、校長、学長に呼びかけて、「岩手県幼小中高大専 ESD サミット」(7/5)を開催し、継続した連携に向けて「岩手県幼小中高大専 ESD 円卓会議」の設立を行った。

これら取組の成果は、行事のそれぞれについて報告書としてまとめ、冊子の他大学への配付や、ホームページ (<http://esd.iwate-u.ac.jp/>) への掲載を行った。

### 3. 取組の成果や評価、人材養成面での達成度

この取組を通じて、岩手大学の教育目標である「教養教育と専門教育の調和」は、「持続可能な社会づくりに主体的に参画する人材」＝「T」字型人間という人材養成像に具現化されるとともに、本学の教育全体の中心的価値観としてESDと宮沢賢治が教員・学生に意識されるようになった。それはプロジェクトを記載した「大学案内」等を通じて

入学前に学生の19.1%が「学びの銀河」プロジェクトを、12.7%がESDを認識している事実に表れている(入学式の新入生アンケート：回答数1079人)。また、卒業予定者と学長との懇談会では、卒業予定者よりESD銀河セミナーを継続開催の要望がなされている。

教養教育については、コアカリキュラムである環境教育科目の充実はもちろん、2年半に新規科目が10科目増加し、ESDというビジョンと学生参加、問題解決が意識されることで、教養教育が①科目間のつながりと②現実とのつながり、さらに学生の学びの③総合性と④実践性という4つのテーマの充実に向けて大きく前進した。これらの受講者の授業アンケートには、「受身ではなく自分から動くことを第一の目標として参加していきたいと思いました。」の例に示されるように、教養教育を社会を支え改善していく「21世紀型市民」へ向けた主体的学びと受けとめる学生が生まれてきたことが一番の成果である。

2年半の取組を通じて、入学前の大学説明会や「大学案内」から、入学式のオリエンテーション、全学必修の「基礎ゼミナール」へと、学生に対して「T」字型人間とESDという人材育成像を意識させ、教養教育を学ぶ意義の徹底と意欲喚起への枠組みが出来上がったこと、それに応えて教養教育を充実させていく方向性ができたことが成果である。

### 4. 学内からの評価、教育改革への影響等

全学共通教育の「授業アンケート」に「この授業及び授業時間外の学習中に、持続可能な社会や環境等について考える機会がありましたか」の設問を置き、-2(まったくない)から+2(あった)で回答をさせた結果、平成20年度後期では、環境教育科目が1.31、

総合科目が0.25とプラス、社会科学分野が-0.14、情報科学が-0.37、自然科学分野-0.46、人文科学分野が-0.59であった。このプロジェクトは、始まったばかりであり、今後、この数字がプラスへと改善していくことが期待される。教職員と学生の間で、学部を越えた大学としての人材育成像が「持続可能な社会づくりに主体的に参画する人材」＝「T」字型人間と可視化されたことにより、様々な教育改革を行う際の目標の共有化が図られるようになった。この目標の共有化により、学部や教育支援施設の間で連携の取組が生まれてきている。例えば、日本語研修の留学生を受け入れるセミナーにおいても、ESDのビジョンを掲げるとか、キャリア教育のコンセプトにも持続可能な地域づくりがテーマとされるなど、ESDのビジョンの下に企画の連携が進んでいる。さらに、今プロジェクトを通じて「学びの銀河」と宮沢賢治が大学のブランド・シンボルとして定着した。

## 5. 学外からの評価、波及効果等

このプロジェクトは大きな関心呼び、内容を紹介する講演の依頼は、琉球大学、大阪大学、愛媛大学、弘前大学、大学教育学会、科学教育学会、宮城教育大学、ユネスコ研修会、ESD-J総会、環境省研究会等、多数に及んだ。また、国立教育研究所、一橋大学から調査訪問があった。このプロジェクトで開催した国際シンポジウム、HESDフォーラム、幼小中高大専ESDサミット、またESD銀河セミナー等は、その都度、地元で大きく取り上げられた。他大学がこのプロジェクトに関心を寄せた最大の理由は、教養教育に共通の目標を設定して、全体のまとまりをもたせるという点である。教養教育は、とりわけ教養部解体後、授業内容が担当者任せとな

り、科目間のつながりを欠き、まとまりのあるプログラムとなり得ていない現状があるからである。それに対して本プログラムは、教養教育の「体系化」に対してESDによる「ネットワーク化」というビジョンを提示して大きなインパクトを与えた。

また、幼稚園から大学までの連携というコンセプトは、地域の教育界から歓迎され、「テレビを消して読書する共同行動」等、継続的な連携へと結びついて行っている。

## 6. 今後の展望、課題

2年半の成果を踏まえて、引き続き教養教育の授業科目にESDを織り込んでいき、科目間のつながりと現実とのつながり、学びの総合性と実践性を充実させていくことが課題である。そのためにも、ESD銀河セミナーを継続開催して、学生・教職員にESDの普及を図っていく。環境省から支援を受ける「ISO14001と産学官民連携を活用したπ字型環境人材育成プログラム」を後継プログラムと位置付け、副専攻的な履修証明へ結びつける。国内の大学とのHESDフォーラムを継続開催して連携を維持すると共に、北東北三大学の間で開設したESD科目をICT活用により継続開講する方向を探る。岩手県内の幼小中高大専ESD円卓会議を継続して、環境に関する共同行動や共同セミナーを定期的に行っていく。

第2期中期目標・中期計画にESDの充実を位置付けて、計画的に取組を強め、国連「ESDの10年」が終了する2014年までに国内の高等教育におけるESD拠点としての地位を確立する。



---

文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」平成18年度採択事業  
「持続可能な社会のための教養教育の再構築：『学びの銀河』プロジェクト」

評価委員

- 森 三紗（宮沢賢治学会イーハトーブセンター前副代表）  
宮野春雄（盛岡地区広域行政事務組合消防長）  
内田尚宏（特定非営利活動法人北上川連携交流会理事）  
小山田準（特定非営利活動法人北上川連携交流会事務局長）  
小林英世（岩手県環境生活部環境生活企画室）  
川上圭一（岩手県教育委員会）  
宮 順子（岩手県国際交流協会）  
砂山克彦（岩手大学人文社会科学部長）  
栗林 徹（岩手大学教育学部教授）  
中澤 廣（岩手大学工学部教授）  
広田純一（岩手大学農学部教授）
-

学 び の 銀 河



IWATE UNIVERSITY

岩手大学の書体は卒業生である宮澤賢治の流筆を基に構成した。

「岩手」は春と修羅の百次原嶺より抜粋。

「大学」は青木大学士の野翁、1頁目の原嶺より抜粋。

〒020-8850 岩手県盛岡市上田三丁目18番8号  
TEL.019-621-6091 <http://www.iwate-u.ac.jp>

■お問い合わせ



TEL.019-621-6554 FAX.019-621-6065 E-mail [ginga@iwate-u.ac.jp](mailto:ginga@iwate-u.ac.jp)

